

理事長・学長

インタビュー

畿央大学

ふゆき 冬木

まさひこ 正彦

理事長・学長

# 建学の精神を体得した 人間性豊かな人材を育てる

冬木学園の歴史は昭和二十一年（一九四六）、奈良県認可の「冬木文化服装学院」の創設に始まります。終戦後、女性の人権が認められるようになった時代の流れの中で、経済的に困難な中ではあっても、女性にとって社会的自立が何よりも大切であると考えた創設者冬木智子名誉学園長の女子教育に懸ける理想の最初の表現として誕生しました。

昭和三十九年（一九六四）に学校法人として認可され、地域の支援と期待の中で、桜井女子高等学校（現 関西中央高等学校）、昭和四十一年（一九六六）に桜井女子短期大学を開学し、さらに昭和五十四年（一九七九）には桜井女子短期大学付属幼稚園（現 畿央大学付属幼稚園）を開園しました。「徳をのばす」「知をみがく」「美をつくる」を建学の精神とし、地域に根ざした有為の教育機関として、約二万人の卒業生を輩出しています。

畿央大学は平成十五年（二〇〇三）年四月に健康科学部一学部二学科で奈良県・広陵町に開設しました。

現在、健康科学部（理学療法学科、看護医療学科、健康栄養学科、人間環境デザイン学科）と教育学部（現代教育学科）の二学部五学科および大学院 健康科学研究科（健康科学専攻（修士課程）、健康科学専攻（博士後期課程））と教育学研究科（教育実践学専攻（修士課程）、助産学専攻科を備え、高潔な人格と幅広く高度な学識・技術を身につけ、地域社会および国際社会の発展に創造的に貢献できる有為な人材を育成することを目的としています。

今回のインタビューでは畿央大学の将来構想を中心に、特色ある取り組みについてお話を伺いました。

「徳をのばす」「知をみがく」「美をつくる」

畿央大学の将来構想について伺います。

学長 学校法人冬木学園は建学の精神とし

て「徳をのばす」「知をみがく」「美をつくる」

の三つの理念を掲げています。本学の建学の

精神も同様であり、豊かな人間性を追及することこそが教育の最終目標であるという考え方に立ち、創立以来一貫して本学のすべての教育活動の中でこれを具現化すべく取り組んできています。

つまり、この理念を体得し、豊かな人間性を備え、より良い社会づくりに貢献できる人材育成を追及し続けるということが本学の将来構想の中心になります。さまざまな事業を構想し実施するにあたって、学生一人一人が「徳をのばせる」、「知をみがける」、「美をつくれる」、というような教育を継続し、そういった人間に成長できるように感化を教員が与える——そういったことを中心に考えています。

「やさしさを「チカラ」に変える。」

学長 本学は、開学以来、「やさしさを

「チカラ」に変える。」というキャッチコピーを掲げています。入学した学生は、本人が持つ



冬木 正彦 理事長・学長

昭和22年2月2日生まれ  
京大物理学博士

昭和43年 学校法人冬木学園理事  
平成7年 関西大学工学部教授  
平成19年 同 環境都市工学部教授  
平成25年 学校法人冬木学園副理事長  
畿央大学副学長  
関西大学名誉教授  
平成26年 学校法人冬木学園 理事長  
平成27年 畿央大学学長

## 90年代 苦しい時代に未来を構想

—— 大学は一四年前に開学したわけですが、  
当時もそれほど状況が良かったわけではない  
と思います。

学長 十八歳人口の減少は一九九三年から

—— 教職員も  
学生一人一人を支えながら—— 将来の夢の実  
現に向けての道筋を在学中につけて、社会に  
巣立っていつています。

卒業生は社会からきわめて高い評価を得て  
います。また在学生も地域連携というかたち  
で地域や社会と関わり、在学中から高い評価  
を得ています。

このような評価からも本学への期待が高ま  
り、入学を希望する学生をきちんと確保でき

ていますので、本学が目指す教育、理想とす  
る教育も実施できるということで、人口、学  
内での教育、そして出口というサイクルがス  
パイラルに上手く回っているというのが現状  
です。

このサイクルを回し続けるためにさまざま  
な事業や取り組みを進めていくということに  
なりますが、基本的には、現在きちんと実現  
できていることを持続・発展させることが最  
優先であると考えています。

始まっていますから、本学も一九九〇年代後  
半には非常に苦しい時代を短期大学で経験し  
ています。

そのときは何か新しいことをしようと思っ

## 人気の土地に立地

でも、まず場所がありません。それから、社  
会から求められている分野も明確ではありません。  
せん。何よりそういう社会の情勢に対応でき  
る人材が不足していました。

学園として何とかしなければいけないとい  
うことで、前理事長（現 名誉学園長）はずっ  
と悩んでいたのですが、場所については人の  
つながりから、新しい土地の候補として、今  
の場所が挙がり、名誉学園長がすぐに見に行っ  
て決断することとなりました。

—— 最寄り駅の五位堂駅は交通の便がいいで  
すね。

学長 はい。学生は五割が大阪、三割が奈  
良から来ています。実はそれ以外にも京都、  
三重、和歌山、兵庫など関西の各地から通学  
しており、とても便利な場所にあります。

私は以前、UCバークレーに行っていたの  
ですけども、大学の周辺の街の佇まいがカリ  
フォルニアの雰囲気似ているんです。道は  
広くて、建物も一軒、一軒、違う。大学の隣  
にはショッピングモールがあり、大学から駅  
まで歩いて行ける。朝、みんなウォーキング  
やジョギングをしているなど、関西では人気  
が高い場所なんです。

いろいろなつながりから、偶然この場所を  
得られたわけですが、どういう分野に参入す  
るかということについては、前事務局長を中  
心に新たに得られた人材を含む大学設置準備

委員会が立ち上がり、さまざまな選択肢のある中から、新しいニーズを探って、当時、四

年制大学には少なかつた理学療法に着眼しました。

## 理学療法分野の優秀な教員が集まる

——私立の四年制大学としては関西で初となる理学療法学科を二〇〇三年に開設したという事で、先見の明がありました。

**学長** はい。受験生のニーズの高さにはもともと確信がありました。理学療法の分野におけるより良い高等教育の機会を提供したいという先生方のご協力も得られ、良い教員が集まりました。理学療法のそれぞれの分野から、きわめて優秀な若い教員が来た。それがニュースになることで、他の学科の受験倍率も一緒に上がって。

——良い方に向かって行くわけですね。

**学長** はい。その最初のきっかけになりました。

## 健康科学分野のリーダーを養成する

**学長** その後、大学院開設に伴って、金子章道先生（現 健康科学部長・健康科学研究科長）に来ていただいたのですが、健康科学分野のリーダーを養成するとともに、世界に発信する独創的な研究をできる人材育成のため開設した大学院では一〇年間で既に、一六四名の修士と一八名の博士（健康科学）を世に送り出しています。

大学院では職場でリーダーとなり、やがては後輩の指導に当たることができる人材を育

## 科研費採択率36・6%

**学長** 本学では研究活動をきわめて重視していて、大学として研究力を高めるため、それぞれの教員に研究活動のベースとなる年間の個人研究費を保障するなど、十分なバックアップをしています。

二〇一六年度の科研費の採択率は全国平均が二六・四％ですけれど、本学は三六・六％です。

昨年は約三八％、その前は二二％前後なので、昨年からはグッと上がったわけです。

科研費の採択率が高いことが伝わると人事においても全国から優秀な研究者が応募してきますから、研究面でのポジティブな状況も回りだしています。

## 新しい研究分野のセミナーに参加者が殺到する

**学長** 例えば、本学の教員が研究している「ニューロロハビリテーション」は新しい研

て、また実務を経験して自分の持っている知識に不足を感じている方、新たな疑問を感じてその解決に取り組もうとしている方たちのための教育プログラムができています。さらに博士論文は国際学術雑誌に掲載されるなど、高く評価されています。長期的な研究テーマに取り組むための環境も整い、活発な研究活動を展開しています。

究分野ですが、ニューロサイエンスに基づくリハビリテーションは最近とても注目されています。定員三〇〇人のセミナーをネット上で参加者を募集すると一〇分程ですぐに埋まってしまう。このことから、この分野における本学の知名度が全国的に高くなっていることがわかります。

## 環境から美しく

**学長** 大学院の健康科学研究科と教育学研究科では、それぞれの専門分野の教育研究に取り組んでいます。いずれも人間を総合的にとらえる視点を持って教育研究を行っています。その中で「美しく生きるための健康科学総合特論」、「美しく生きるための教育学総合特論」をそれぞれ必修科目とし、建学の精神にのっとり、人間の幸福を最終目標とする教育研究を行っています。

また、本学に来た人はみんな建物がきれいだと言います。一四年前の建物ですけど。実はより美しく見えるようにタイルの一枚一枚の色を名誉学園長が決めたんです。

## 海外インターンシップで海外の「学びの姿勢」に触れる

グローバル人材の育成の取り組みについて伺います。

**学長** グローバル化への対応や、グローバル人材をどう育成するかについては、非常に重要なことだと思っています。

ただし、国際競争力の高い大学におけるグローバル化と、入学定員の確保に苦労している大学のグローバル化は違ってきますから、注意して扱わなければいけないと思っています。

では、本学はどうするのか？ ということですが、その点は「教員と学生のポトムアップに基づいて推進する」という方針で進めています。具体的には、国際学会などで知り合いになった研究者のつながりから、学生の交流が始まっていくというがあります。

本学はもともと冬木文化服装学院からはじまっています。そういうデザインやセンスという意味でも、「美をつくる」というところを大切にしています。

それから、今年から海外インターンシップの内容の充実を図りました。例えば、台湾国立大学やオーストラリアのラ・トローブ大学、現地の病院などに学生が行って、そこで本学の取り組みを紹介して、向こうの取り組みを学習してくるというような取り組みをはじめています。

百聞は一見にしかずと言いますし、もちろん英語力を何とかしないといけないことがはっきりわかるということもありますが、きちんと将来のことを考えて学んでいる海外の学生の「学びの姿勢」に触れることが刺激になるようです。それぞれの国における学習の仕方の違いを体験することで、学生はきわめて大きな収穫を得ているのではないかと思っています。

## 生命倫理を基盤とした教育を行う

特色ある教育について伺います。

**学長** 本学で実践している教育の特色としては、一つ目は、本学はどの学科においても

人と関わり、いのちと向き合う職業人の育成を目的としていることです。そのため、学生にいのちの尊さや生命倫理について深く理解

させるために、教養科目において「生命倫理」を全学必修としています。

テキストは本学教員の共同執筆で出版した『学生と考える生命倫理』（ナカニシヤ出版）を使用し、現代社会で遭遇する生命倫理の諸課題をそれぞれの教員が語っています。授業は学科ごとにオムニバス形式で実施しています。各学科に特有の課題も取り上げつつ、研究倫理についても教えています。生命倫理を基盤とした教育は本学の教育の根幹として位置づけています。

## 知識・理解と技術をバランスよく学ぶ

**学長** 二つ目は、スペシャリスト養成のカリキュラムです。健康科学部においては、専門分野に対応した資格取得のためのカリキュラムを充実させ、理学療法士、看護師、保健師、管理栄養士、建築士などの国家試験の受験資格が得られます。また、国家試験についても受験対策講座や個別指導などにより高い合格率を実現しています。

教育学部においては、小学校、幼稚園、中高英語、養護、特別支援学校の教員免許状取得や保育士、認定心理士などの資格取得に必要な科目が開設されています。

理論的な科目にはその演習・実習科目を配し、知識・理論と技術をバランスよく学ぶことができるカリキュラムを構成して、専門職業人に求められる高度な知識とスキルを育成しています。さらに、卒業生が最先端の知識

と技術を学ぶことのできるリカレント教育にも取り組んでいます。

## 「体験型」授業を重視

**学長** 三つ目は、「体験型」授業を重視しています。実社会で即戦力となる能力を身につけるため、実験・実習などの体験型授業を多く開設していて、学内における実験・実習のほか、理学療法学科の「臨床実習」、看護医療学科および健康栄養学科の「臨床実習」、人間環境デザイン学科の「プロジェクトゼミ」「企業インターシップ」、現代教育学科の「教育実習」「保育実習」「学校インターシップ」などを学外の医療機関、福祉施設、保健所、企業、教育機関などで実施しています。実習では、事前指導や実習後のレポート提出などにより、実践的な知識の定着と職業観の育成をはかっています。

学内の実習室には、最新の実験・測定機器を揃え、これからの社会に必要とされる専門的能力を身につける環境を整えています。

## 学部や学科の枠を超える

**学長** 四つ目は学部や学科の枠を超えたコラボレーションです。健康科学部では人々のQOL (Quality of Life) を向上させるという理念のもとに各分野が連携しています。さらに、教育学部を設置したことにより、人間の社会的側面を含むよりトータルな視点か

らQOLを探究できる体制が整いました。「心豊かに健やかに生きる」という目標を共有することによって、学部や学科を超えたコラボレーションの可能性を探り、連携をはかりながら社会に積極的な提案をしています。

## ICTの活用能力

**学長** 五つ目はICTの活用によるアクティブラーニングの促進です。ICTの活用能力というのは、ソフトの利用に限って言えば、ソフトが対象とする現実世界の物や役割がわかって、「こんな機能があるはずだろう」という推論ができて、その機能がどこにあるか

## 成果を地域に還元する

地域連携の取り組みについて、特に広陵町×畿央大学「KAGUYAプロジェクト」について伺います。

**学長** 本学は開学以来、地元の広陵町と連携して、運動教室や体力測定、介護予防、認知症施策などさまざまな健康増進のための取り組みを行ってきました。その実績もあり、平成二十七年度には奈良県で初めて文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択されました。

テーマは「ソーシャル・キャピタル創出とヘルスケアデータ一元化による地域包括ケアシステム研究拠点の形成」です。広陵町が竹

を探す力がある、ということだと私は思っています。そのために必要なのは、一つ一つの操作の仕方を教えることではありません。操作を教えるだけでは役に立たないんです。

本学では平成二十六年度の入学生から一人一台、タブレット型のコンピューターを貸与し、個人で自由に使える環境を整えました。たとえば、対面授業を支援するeラーニングシステム「CEAS」を導入したり、これらの環境を活かした授業改善に取り組んでいます。コンピューターを全員に配布すれば、アクティブラーニングができるというわけではありませんから、さまざまな工夫や取り組みを行っているところです。

取物語のかぐや姫伝説の地であることにちなんで、うまく頭文字を組み合わせて「KAGUYAプロジェクト」という愛称で呼んでいます。

「KAGUYAプロジェクト」は、①ヘルスケアデータをまとめたデータベースの構築  
②健康状況を簡単にできるアプリ開発、③住民リーダー（介護予防リーダー等）の育成、④住民の健康支援を学生チーム（TASK）が行うことによる教育的実践活動——という四つの事業をメインとしたプロジェクトに取り組んでいます。

「TASK」というのは、学生が自主的に





組織している健康支援チームです。全学科から一〇〇名ほどの学生が参加して、地域の健康づくりを支援するため、体力測定をしたり、高齢者の体操指導など、さまざまな取り組みを行っています。

これまで畿央大学の学生ボランティアは、教育面では学外から高い評価を得ていましたが、今回、KAGUYAプロジェクトが研究面において評価されたことは、とてもうれしく思っています。

地域貢献については、このほかにも、たとえば御所市と連携して「認知症カフェ」を本学のゼミ生が実施しています。御所まで行くのは交通費がかかりますが、学生が参加する場合には大学が交通費を補助しています。本

学では学生の正課の教育に直接関係するものについては、支援していこうという方針です。

学生の教育にプラスになるのであればということでも実施しています。

## 一人一人の学生を支援する「ダブル担任制」

——学生のボランティア活動を大学として支援しているということですが、学生支援の取り組みについて伺います。

学長 学生には在学中に夢を叶える道筋をつくってほしいわけですが、学生は一人一人夢も違えば、モチベーションも違う。では、それを放っておいていいのだろうかと考えます。本学は専任教員によるクラス担任制をしいており、まず教員が学習面に関して密に相談できるようにしています。また就職・キャリア支援については、学科担当のキャリアセンター職員がついて進路支援を行っています。つまり、一人の学生を教員と職員がサポートする「ダブル担任制」により、本当は何がしたいのか、そのためにはどういう学習をすればいいのかといったことをはじめ、きめ細か

くサポートしています。

本学の特徴でもあると思いますが、学生がグループで切磋琢磨しています。自習室を用意しているのですが、夜の九時を過ぎても学生で一杯です。みんな勉強していて、そういう雰囲気は大切だと思っています。いわゆる国家試験に対しては、教員も常にフォローをしています。

——メンタルヘルスの支援体制についてはいかがですか。

学長 本学では、大学生活の中で何か困ったことが起きたとき、あるいはモヤモヤしたり、悩んだりしたときに臨床心理士に相談できる「こころば」という学生相談室があります。学生が安心して相談に行けるような雰囲気をつくっています。

## すべての情報を公開することで信頼を得る

——いかに優秀な学生を集めますか。

学長 ユニークなことはやっていませんが、個性輝く大学をめざすことです。心がけているのは、入試情報はもちろん、教育内容とその成果を包み隠さずに発信していくこと。そ

れによって、高校の先生方からものすごく信頼を得ています。もちろん、苦しいときもありましたが、苦しいときもずっと情報公開をしてきました。結果として、志願率や受験倍率につながっていると思います。